

耳納風土記

まぐさば
「生葉郡の秣場騒動」

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎75-3343

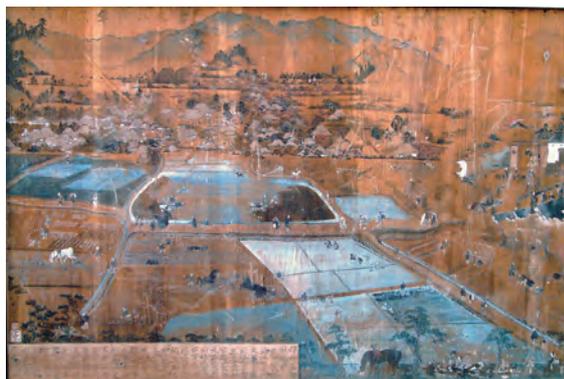
令和3年度11月号で宝暦一の木を切り倒したといわれて、また新たに植林を始め、山に拵について紹介しました。百姓一揆の中でも、規模が大きく、うきは市を含む全藩域に及んだ宝暦一揆は増税を機に幕政への不満が爆発したことによって発生しました。厳しい年貢の取り立てや天災地変による飢饉等が原因で発生する百姓一揆は江戸時代を通じて約三千二百件を超え、未遂に終わったものを含めると見当がつかないほど多いといわれています。今回の耳納風土記ではその中でも、幕藩権力のその末端機構である庄屋などの村役人層と小農民の間で起こった対立「生葉郡の秣場騒動」についてご紹介します。

事の始まりは慶応3年（1867）4月の朝。手に斧や竹槍等を振りかざした五百人から六百人の農民が妹川村・星野村になだれ込み、生い茂った杉や竹などを手あたり次第伐り倒していきまし。彼らの暴動範囲は広がり、久留米藩の植林地までも手にか、10時間で約一万二千本

の木の切り倒したといわれて入っていく里辺の百姓を追い出すようになってきた。現に一昨日秣を差し押さえられた者がいる。それがこの度の暴動の原因である」と。

この慶応3年という年は幕藩体制が崩壊し、明治政府が誕生していくという大転換期であったために収拾のできないような社会状態になっており、里辺農民は藩権力に対して強い抵抗をしているが、藩はそれに対して適切な処置をとることができませんでした。久留米藩の植林政策についても財政に困窮していたために無理に推し進めたものでした。そのような状況下で様々な要因が重なりこの「秣場騒動」が起こってしまったのです。

この秣場騒動は慶応3年で終わることはなく、翌年4年には第2次秣場騒動が勃発します。次回の耳納風土記ではこの第2次秣場騒動とその後について見ていきましょう。



老松神社農耕絵馬（市指定有形民俗文化財）



溝口天満宮農耕絵馬（市指定有形民俗文化財）

このような絵馬が市内各地に残っているため、当時の農耕の様子を詳細に知ることができます。